

「文化財を守る―東海大震災に備えるには―」

シンポジウム

「文化財を守る―東海大震災に備えるには―」

パネリスト

東北芸術工科大学教授

藤原 徹（ふじわら・とおる）

名古屋市博物館学芸員

瀬川貴文（せがわ・たかふみ）

名古屋市立大学大学院教授

山田 明（やまだ・あきら）

司会

同教授・人間文化研究所長

阪井芳貴（さかい・よしき）

阪井教授：こんにちは。シンポジウムをはじめます。まず先ほどの藤原先生のお話を受けて、お話をさせていただきたいと思いますが、自己紹介を兼ねて、名古屋市博物館学芸員の瀬川さんからお願いいたします。瀬川さんは、いま写真が映っておりますけれど、名古屋市から文化財レスキューとして被災地へ行かれ、現場で文化財を修復してこられ、さきほど藤原先生のお話にあつたような、そういう現場での仕事をなさったご経験があります。そのへんのお話から始めたいと思います。



瀬川学芸員：よろしくお願ひします。名古屋市博物館学芸課の瀬川と申します。お話しさせていただきます。わたくし先ほどご紹介いたしましたように、名古屋市から文化財レスキューの一員として派遣されました。先ほどの先生のお話もあつたようにいろいろな仕事があつたと思うのですが、私は比較的短い期間ということもありまして、人足といますかとにかく資料を運び出すことをおこなつてまいりました。

文化財レスキューということで先ほどからお話が出ておりますが、こちら先生も挙げられた図を文化庁のホームページからとつてまいりました。たぶん文化庁は今実施主体ということになっておりますが、当初は寄付金等で賄うということになっておりまして、わたくしは名古屋市の職員として赴いたわけなんです。そのときもお金の方は名古屋市のお金でということ、滞在費等も名古屋市から出ました。なにも国から行つてくれと言われたわけではなく、こういったのがあるので来られる人いませんかという照会がありまして、それに応募するといいますが、ぜひ協力させてくださいということで行つたことになりました。

ただ行つたのは実は七月の中ごろです。もう震災がございましてから



四か月がすぎたころでありました。それは先ほどの話にもありましたように、仕組み自体が震災があつてすぐに動き始めたわけではなく、そのあといろんな調整もございましたし、こういった制度ができたのも先ほどの話にもあつたように四月後半ぐらいで、こちらの方にお話が来たのは五月ぐらいだったかと思えます。そこからまた名古屋市としてどのように行けるのかという話もございまして、仕事の都合等もありまして、行ったのが七月の中ごろ、もう夏の暑い時期になっておりました。行きましたのは宮城県亘理郡亘理町、(画像を見ながら)すいません。こちらの赤丸が仙台市になります。で、仙台市のもう少し、もう少しというよりもっと南ですね、車で一時間ほどかかる場所でございます。ニューズ等で流れた仙台空港のさらに南の場所になっております。阿武

隈川がこのあたりだったと思えます。で、もう少しアップにしますとこちらのほうに川がございまして私が行ったのがこのあたりの民家でございます。

民家の土蔵の資料を救出するという作業でございました。亘理駅に町の資料館、悠里館がありまして、そこが現場のレスキューの拠点となつておりまして、民家からこちらのほうに資料を運ぶという作業でございました。

はい、大体こういった形で作業をしております、わたくし作業の様子を紹介をさせていただくわけですが、まず朝の七時半ごろでしたかね、七時半までには入ってくださいということ、七時半前には仙台市博物館に入りまして、そこから車で一時間ちよつと行って、先ほども言いました資料館に行きました。こちらから打ち合わせ等ミーティングをしまして実際にレスキュー現場に行きました。四つの班にわかれました、私はA班ということで、その現場で裏から資料を出して仮梱包をする、運び出し傷つかないようにするための梱包作業をしました。

それを悠里館に運びましてこちらでリストの作成、先ほども先生もおっしゃっていましたが、写真を撮つて何を出したのか、何件出した

のか、そういった記録をする作業とか、その場でできる応急処置、あと、水をかぶった資料とかぶつてない資料を分けて、かぶつていない比較的状态のいい資料に関しては、隣接する市町村のまた別のところにとりあえず預かっていただくということで運びました。そちらの方はB班が担当しました。

あと水を被つてしまつてもう凍結乾燥しないといけないという資料に關しては、そのときは冷凍庫を借りることができたらしく、そちらの方に運ぶ班ということでC班がございました。

あとB班の方でリスト等を作成して、水損資料でちよつと処置しないといけない資料というのはこのB班で処置をしておりました。

はい、こちらから写真が続きます。現地訪問ということで仙台市博物館の方に行きました。もちろんこういった部屋がもととあつた訳はございませんでして、レスキュー事業本部ということでほんとに通路といいますが、突き当たりのところ、この辺りですね、その突き当りの一角を緊急的に部屋にして電話とかですね、あと資材、こちらのほうダンプボールがたくさん積んであります、そういったものを積んだりして、そういった場所を作っておく形

# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

ですね。

で、こちらの方が現地に赴きました。仙台市博物館から一時間ほどですね、悠里館というこちらのお城を模した資料館等がございまして、そこに集合しました。

この中で私ほんとに行くまで思いつかなかったですけども、ほんとうにレスキュー事業で何が必要かという、車、車がないと何も運べないですね。で、その車の手配にまづ当初はかなり手間取ったという話が出ていました。こちらの車は奈良国立文化財研究所から乗って来たということですよ。

現場近くになってまいります。こちらが堤防の上に少し登って撮っております。堤防がございましてこちらのほうが川ですが、もうこちらの方にいくと海岸線がスッと見えている。こちらの方の堤防を越えて津波が押し寄せてきたというような場所になっております。私が行きましたのは先ほどもうしあげましたように七月でございましたので、がれき等はだいぶ撤去されているんだと思います。基礎等は残っているような形です。こういったような消火栓の看板などの上の方まで津波が上がってしまったりとか、看板もなくなっってしまったらどうか、めっちゃめちゃな状況になっていました。

現場の方は旧家で、こちらの方はまだ比較的新しいもので、この裏に蔵があります。かなりこのあたりも損傷しています。普通のおうちです。資料を運び出して梱包するという場所もございまして、外にブルーシートを敷いて、そこに出てきて仮梱包するという作業でした。

こちらの資料、主には文学資料、近代の文学資料が主にある蔵でございまして、津波の被害で見ての通り壁が崩れておりますが、実際に水に水没したのが一階で、二階の床に行くか行かないかくらいのところまでが水没、で幸い主な文学資料に関しては二階のほうに置いてありましたので、水に被ることはなんとか避けられたということです。蔵のかなり頑丈な鉄の扉とかも破壊されておりました。

当然、電気がまだ復旧しておりません。そういった真っ暗な中で作業するところをカメラのフラッシュを焚いて撮りました。こういった風に水に浸かってしまっていて、一階部分はぐしゃぐしゃになっていました。

こういったところで作業をしており、七月で大変暑い場所でもございました。電気もありませんし、トイレも復旧しておりませんでしたので、

一緒にいったメンバーの中では女性もいましたが、現地に関しては男のほうがいだろうということで男だけでいきました。こちらだけで十人くらいのスタッフが行きました。あとB班、C班、D班と合せて三十名ちよつと越えるくらいの人数で携わりました。国立の博物館とか研究所、私のように各市町村からきた学芸員、ボランティア、あと地元の大塚町の職員の方、そういった方が参加されていきました。

博物館等で資料をお借りして運ぶときは、すごく嚴重に梱包して運ぶのですけれど、そんなことしている場合ではございませんので、簡易な梱包、しかもほとんど梱包しなくていいものはそのまま車に乗せて運びました。

こちらは一階にあった文書ですが、水に浸かってそのままの状態です。三・一一からそのままの状態、おそらくヘドロといいますか、いろんなものを含んだ水に浸かり真っ黒になっている文書が見つかりました。正直私これを見たときは匂いもすごくて、これは無理なんじゃないかと思つたのですが、この家の明治頃といたしますか初代の方のことかを書いた書類だということはわかりましたので、できれば残していきたいものだということで、応急処置等をし

て水でとりあえず洗い流していきま  
した。

こちらのほうが悠里館、先ほどの  
場所まで運んできたものをどんと  
写真を撮ってリスト化していく、そ  
ういった作業をこちらのほうでやっ  
ております。この日は一日の作業で  
およそ一五〇件、点数はもっと多い  
ですが、それくらいの資料を運び出  
して一応処置をしていくとか、必要  
なら凍結乾燥するという判断をし  
ておりました。

こういう風に作業していつており  
まして、こちらの資料に関しては個  
人のお宅から持ち出した近代の文学  
資料等ですが、基本的には亘理町が  
最終的に引き取るという形で話がで  
きておりまして、運び出しの際にも  
亘理町の職員の方が同行されて、「こ  
の資料は必要です。この辺りのもの  
は…いいです。」ということ判断  
されました。我々はどこまでレス  
キューするかしないかという判断が  
つかないので、そういった判断は亘  
理町の地元の方がやられて、我々は  
本当に持ち出すと判断されたものを  
運ぶということをしました。

私こちらのほうのレスキューに参  
加したいということを見せて頂いた  
のですが、行って現場を見ておきた  
いということがありました。こちら  
名古屋は、東海地震、東南海地震

などがいつ起こるのかわかりませ  
んで、そういったとき名古屋市の博  
物館としてどういったことができる  
のか、すべきかということ、現場  
に行って持ち帰りたいなと思ってお  
りました。また後で先生のほうから  
教えていただければと思うのです  
が、やはり事前の備えと言うもの  
を、何をすべきなのか、ということ  
がすごく大事なことだと思ってい  
ます。

当然博物館は、震災、火事とかそ  
ういったものへの対策はしておりま  
す。博物館自体も大震災がきたらど  
こまで耐えられるかということはま  
だわからない部分がありますが、で  
きるだけ資料を守るといった対策を  
行っていくつもりです。けれども、  
今回の津波のように地域一帯の文化  
財に被害が出る、というときに何が  
できるかということに関しては、正  
直あまり検討が進んでいないとい  
うのが現状です。これから進めてい  
かなければいけないなと思ってい  
ます。

あと実際の体制は一体どうなるの  
か、今回は文化財レスキューとい  
うことで私が行きました。その間調整  
などで二ヶ月ほどかかりましたが、  
それをどれだけ迅速にできるように  
体制を立てていくのか、何を文化財  
としてレスキューできるようにして

いくのかこういった選択も現場では  
重要になってくるだろうと。

ちよつと余談になりますが実際の  
体制というところでですね、結局名  
古屋市がもし被害に遭ったら、何が  
できるかということ、できることは本  
当に限られます。仙台市博物館の方  
に時間がありましたので話を伺った  
のですが、被災した博物館というの  
は自分の館の復旧、開館に向けての  
作業が大変忙しくなってきたり実  
文化財レスキューに参加したくてもな  
かなか参加できない部分があったと  
お伺いしました。そういったことで、  
実は周りからの協力体制を作ってい  
くことが重要なかなと思ってい  
ます。

そういったもの一つとしてです  
ね、全国美術館会議という名前が出  
ておりましたが、美術館とか動物  
園、植物園、そういったところは全  
国的な組織があるのですが、実は歴  
史系・民俗系の博物館にはそうい  
った組織がありません。というのは全  
国で四千近い館がございます、そ  
れを纏めることはなかなか難しいと  
言うこともありまして、今までそう  
いった組織はなく、基本的には博  
物館協会という日本の博物館を纏め  
ている組織の関係で私は行ったので  
すが、やはり歴史民俗系の博物館の  
動きが、ほかに比べると非常に遅く

# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

なってしまったということがございました。

そういった組織・連絡体制を作る必要があるだろうということ。最近、一月一日に文章が届きました、国立歴史民俗博物館と江戸東京博物館が主導を取られて、あと地域ブロック毎で代表となる館、賛同する館が集まってですね、こういった会を作って震災に備えていきましようということは今ちょうど始めたところ。この会がどういった会になつていくのかはまだ見えない所もありますが、そういった中に名古屋博物館も参加させていただいております。

最近気になっていることで、事前の備えの一つとしてリスト化という話も出ておりますが、重要だろうと思っております。(画像を見ながら) ちょっと名古屋全市全域の地図を見ようと思うとなかなか難しいのですが、この辺赤くなっているのが何かしらの文化財がある所で、☆マーク等が入っているのが所謂、国指定、県指定、市指定の文化財です。私が一人でやっている作業ですが、とりあえずやっております。

この辺りもあるのですが、今、実際どれくらいの高さまで洪水に被害が出るのか分かってない部分もあるかと思えます。いろんな話がござい

ます。これは参考としてなんです。例えば、今十メートルという等高線で引いていきますとこういうふうな形で入ってまいります。私専門が考古学でございまして、縄文海進、縄文時代には海が陸地に入り込んでいたのですが、それが実は八メートルくらいの等高線になるのです。それに近い地形になるのですが、仮に十メートルが洪水の起こりうる範囲だとすると、やはり西の方はそういう範囲になってきます。堤防やいろんな微地形などに影響されるはずですので、参考としてはこういった高さになっております。名古屋博物館が、このあたりですかね。

山田教授：ちようど。

瀬川学芸員：はい名古屋博物館このあたりで、熱田神宮がこちらの熱田台地になっております。ここが名古屋城という風な位置関係になっております。

こういった図をつくりましたが、洪水被害がどの範囲でありうるのかという想定もありますし、もちろん火事とか、そういった想定もしないといけないと思っておりますが、こういったことを少し考えはじめているところ。ですので、こういったこともちよつとやっております

すが、いったいこの辺りはどう、何をすべきなのか、そういったことを今日この後少しお話しできれば思っています。自分の体験のお話でしたが紹介させて頂きました。(拍手)

阪井教授：ありがとうございます。では、引き続き名古屋市立大学人文社会学部教授山田明先生お願いいたします。

山田教授：つづきまして山田が少し話させて頂きます。私は文化財が専門ではなく、地域政策とまちづくり、地方財政を研究しています。先ほど先生から最後にお金の話題も出ましたが、少し違った角度から問題を提起していきます。

三月一日午後二時四六分という時間、ちようど私も大学の六階におりまして、今までにないような揺れ



を感じました。河北新報という仙台を拠点にした地方新聞は、震災翌日の一面に「現代日本社会は初めて巨大複合型災害に直面した」と述べています。世界有数の地震列島で起きたトリプル大災害、巨大地震と大津波、地盤沈下、液状化、そしてまさに人災といえるような原発震災・原発事故。未曾有のトリプル災害が起こってもう八か月が経過しました。

そういう中で、大学の講義で学生たちにぜひとも現地に行ってもらいたいというメッセージを送っています。そのためにも自分自身が現地に早く行こうと焦っていました。阪神・淡路大震災の時はわりあい早く行けたのですが、今回は先ほど先生も言われたように、交通が寸断され、名古屋からなかなか行けません。やっと三か月後に被災地に行くことができました。

これは東北全域の地図ですけど、東北は岩手県にしても福島県にしても非常に面積の広い県が並んでいきます。東北六県のうち岩手、宮城、福島、青森、秋田、そして関東の茨城・千葉あたりにも大きな被害が出ました。名古屋と仙台空港が結ばれてから、とにかく仙台から石巻まで駆け足で行ってきました。これは皆さんも何回もご覧になった仙台空港周辺の写真です。わたしが上空から撮った

写真からも、空港周辺がまだ水に浸かっているのが見えます。仙台空港はよく映像でも見ましたが、一階が水に浸かって上の階や屋上になんとか逃げた人でいっぱいでした。海上空港である中部空港や関西空港の被害が懸念されます。

仙台空港からの連絡鉄道は当時まだストップしており（つい最近開通しましたが）、空港からバスに乗って名取駅まで行き、そこから仙台駅まで向かいました。バスの中から撮った空港周辺の写真ですが、三か月後でも悲惨な状況でした。仙台駅からは仙石線に乗り、開通していた松島海岸駅まで行きました。松島海岸周辺はよく言われるように、数多くの島のおかげで被害がいくぶん少なかったようです。

しかし、松島海岸駅から代行バスで東松島方面に向かうと、景色が一変します。東松島市野蒜地区は中日新聞でも大きく特集が組まれ、涙なくして読めないような記事が掲載されました。写真のように仙石線が大きく破壊されています。石巻駅前の市役所に行きましたが、震災から三か月後には死亡届など出す人たちがごった返していました。五か月後に行った時は、だいぶ落ち着いていました。市役所も震災時はすっかり水に浸かり混乱した状況が、手書き

の新聞を発行して話題になった石巻日日新聞などで生々しく紹介されています。三か月後に行った時は、駅周辺や市役所の中までも魚の腐ったような臭いがしました。五か月後には、まちの臭いや空気が、景色もかなり変化していたのが印象に残っています。

阪神・淡路大震災、今から一六年前の震災ですが、その時にも何回か被災地に行きました。今回のシンポジウムを前に、久しぶりに神戸市立博物館を訪ね、少し話を聞いてきました。博物館の方はご存じだと思いますが、『神戸市立博物館研究紀要』一二号に「阪神・淡路大震災による被害と復旧」というレポートが掲載されています。震災による博物館の被害と復旧過程が詳しく記録されており、たいへん参考になる資料だと思います。お手元の資料の右側に、「被災概要」の一部を載せています。神戸市立博物館のWebサイト「大震災」から入ると、当時の被害状況をビジュアルに見ることができます。歴史的に有名なメリケン波止場の一角に、震災当時の港の状況が少し再現されています。メリケン波止場から居留地に向かうと、古き良き神戸の景観を見ることができます。居留地の一角に神戸市立博物館はあり、一つの観光コースになっている

# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

ようです。このあたりは地盤が弱く、震災により液化化や地盤沈下が進行し、写真のように博物館のエレベーター周辺に段差ができました。

「定点観測」という形で、関西に行ったら必ず神戸市長田まで足を伸ばすことにしてきました。新長田駅界隈は、写真のように鉄人28号をキャラクターに復興まちづくりを進めています。ものすごいお金をつぎ込んで、巨大なアーケード街や高層ビルをたくさん建てました。一見すると復興が進んだようですが、閑散としており空き店舗が目立ちます。とりわけ二階にはほとんど店舗が入っていません。

巨額の借金をして再開発をしましたが、一六年経っても本当の復興には程遠い状況です。長田の再開発は象徴的な事例だと思います。震災からまもなくして、神戸空港の建設や大規模再開発が計画されました。まさに災害便乗型の開発です。こうした傾向が、東日本大震災でも宮城県などで見られます。神戸市長田の事例からも、災害便乗型の開発には注意が必要です。今回の震災復興では岩手県は宮城県とは違った方向のようです。福島県は原発事故により大きな困難を抱えています。

写真は長田の御蔵地区です。人がほとんど歩いていません。家や店は

建ちましたが、なかなか人が戻ってきていません。私の大好きなフーテンの寅さんの最終作は、最後の舞台を菅原市場にしました。寅さんが被災者を励ますシーンが印象に残っています。今はスーパードですが、映画を記念するモニュメントが入口に展示されています。それと三宮から少し行くと、「人と防災未来センター」があります。神戸に行かれたら、是非ここに行ってほしいです。震災資料や写真も保存・展示され、震災を映像で見たり体感できて勉強になると思います。

さて、この地域でも三連動地震、最近では五連動地震が起こることが懸念されています。この四月から、学生と一緒に「東日本大震災と防災・減災まちづくり」をテーマに調査しています。東日本大震災から学んで、名古屋・愛知で防災・減災まちづくりを進めていく課題をさぐるという趣旨です。調査の一環として、震災から三か月後に学生に緊急アンケートを実施しました。アンケート結果によると、三月一日の大震災に大きなショックを受け、津波や原発事故に恐怖を感じたという学生が多くいました。しかし、恐怖感はあるものの、なかなか防災に対する意識や行動に結びついていないという結果が出ました。阪神・淡路大震災、そ

して東日本大震災から学び、災害が他人事ではなく自分たちの問題であり、防災・減災まちづくりの課題を学生と調査していきたいと思えます。

さて、八月四日付の朝日新聞で「文化被災」という特集が掲載されています。先ほど先生からも紹介されました、岩手県陸前高田の市立博物館主任学芸員の熊谷賢さんが、こう発言しています。「文化財が残らない復興は真の復興ではない。それは、この土地の自然、文化、歴史、記憶の集積であり、陸前高田のアイデンティティーだからです。」「三陸の人々は、明治、昭和、平成と津波に牙をむかれながらも、この豊かな海と共に生きてきました。生き残った収蔵品は忘れかけていた海への『畏敬の念』を思い起こさせると同時に、土地の記憶を後世に語り継いでくれるはずだと信じています。」私は文化財の専門家ではありませんが、この発言は心に残るものがあります。それと文化庁長官の近藤誠一さんが、示唆に富むことを言っています。「身近な寺社や文化財、文化施設を失った人たちにとって、食べるものや住むところとほぼ同時に、そうしたものが必要だと感じておられると聞いています。文化の復興は、生活や産業の一步あとに、でも忘れることなく、取り組むべきです。」「博物

館や音楽ホールは、単なる箱物では  
ありません。町の中の不可欠な存在、  
文化的なインフラと考えるべきで  
す。精神的な支えの拠点でもありま  
す。土地土地の、生活の記憶を後世  
に伝えていく、そういうメカニズム  
は重要です。物理的には復旧復興し  
た、きれいな町になった、でものっ  
ぱりして、文化とか地域の記憶とか、  
精神的な支えになるものがなくなっ  
てしまった、ということが過去にあ  
りました。そうならないよう、私た  
ちもしっかりと、取り組んでいかな  
ければと思っています。」

こうした発言、先ほどの先生のお  
話から、「文化被災」や文化財保護  
の意義など、専門は違いますが、い  
ろいろ考えさせられました。そこで、  
二点ほど質問ないしコメントをし  
たいと思います。

一つは復旧から復興に進む過程で  
の優先順位です。被災地では今、生  
きることに精一杯であり、どうやっ  
て生活を立て直すかが喫緊の課題と  
なっています。震災からちょうど半  
年の九月一日に岩手県宮古市に  
行ってきました。明治・昭和と津波  
被害を受けた宮古市田老では、万里  
の長城のような防潮堤が破壊され、  
住民の多くは数キロ離れた仮設住宅  
に避難しています。昨日の天気予報  
を見ても、零下二度くらい寒い仮

設住宅で住んでいる人たちのこと  
が気になります。

今回の大震災は、働く場所、生業  
が問題になっています。働く場がな  
いから、生活再建のめどが立たない  
状況になっています。「文化は二の  
次」、後回しでよいといった論調も  
みられます。私も今回のような深刻  
な事態を見ていて、どう自分の考え  
を整理したらいいのかよくわからな  
いところがあります。先生のお話か  
ら文化財保護の意義と課題について  
示唆を得られました。

文化財の復旧は二の次ではなく、  
緊急性があるのではないかと考えま  
す。時間が経てば経つほど、復旧、  
復興ができなくなるのではと心配し  
ています。病院の先生たちが頑張っ  
ておられますけども、患者さんの状  
況により治療の優先順位をつけてい  
ると聞きます。文化財についても、  
こうした優先順位をつけた取り組み  
や体制があるのか、というのが第一  
点です。

二点目は質問というよりも、先生  
が最後に言われた、文化には金がか  
かるものだという点に関係した感想  
です。

最近とくに効率優先の行政が自治  
体でも進められています。先日、名  
古屋市も「事業仕分け」という形で、  
敬老パスや野外学習センターなどの

廃止が打ち出されました。民間でも  
可能とか、財政効率性が優先されて、  
文化・芸術の分野でも行政サービス  
の再編が推進されています。文化と  
か芸術というのは、我々の世代だけ  
のものではない、単にお金で換算で  
きるものではありません。こうした  
ことが、なかなか理解されにくい世  
の中になっています。文化とか芸術  
の価値を再評価していく必要がある  
と考えます。東日本大震災を踏まえ  
て、「文化財を守る」というという  
のが今日のメインテーマですが、文  
化財を守るための戦略をどう考え  
るか。住民の意識変革を促すため  
に、防災教育とか環境教育と同じよ  
うに、「文化財教育」といったよう  
なものが必要なのではないかと、先  
ほどの先生の話から感じました。協  
働して文化財を守るうえでの課題に  
ついて、ご示唆いただければと思  
います。どうもありがとうございます。

阪井教授…ありがとうございます  
た。今の山田先生の質問の中にあっ  
た、人命あるいはその被災者の生活  
復旧、それと文化財の復興と、どち  
らを優先するかというのは、先ほど  
の休憩時間にいただいた質問の中  
にもございました。そのあたりから、  
では藤原先生お願いします。質問に



「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」



答えるような形で先ほどの講演の補足も含めてお話しただければと思います。

藤原教授・やはり何はなくとも、人命が一番大事だと思います。それに文化が残っても人がいなければ意味がないと思うし、一番に考えないといけないことは人の命だと思いません。それで、その文化財と復興に優先順位をつけるか、という難しい質問ですが、基本的には順位をつけていません。人間の営みのしるしという位置づけを文化財にしておりません。それで、今回の震災の場合、盛岡の美容院をやっておられる方から、思い出の置物だったらいいのですが、震災で落下してばらばらになった、いくらかかってもいいから直してくださいという電話がありました。では拝見しましょうということで、宅急便で送ってくださいって拝

見ましたら、失礼な言い方ですけど、たいしたものではないんです。置物なんですけど、でもこれはやっぱり時間があつた、なんとかしてあげたいと思ひまして、二か月三か月後くらいに、少しづつ時間をみつけた中で直して、送り返して差し上げました。非常に喜んでいただきお電話をいただきました。たしかに美術館、博物館という建物に収蔵されていいますが、みなさんと全く関係ないものではなくて、いわゆる公共の財産。市の博物館であれば、市の方たちが直接かわってはいないかもしませんが、税金で皆の財産として収蔵されていますので、そういう意識で、みんなの財産として大切にあげたいという気持ちでおります。それともうひとつ、文化財と生活との関係ですが、身近に、いわゆる人間の営みが十年、二十年、三十年、百年、二百年、三百年というものが存在しない空間というのは、やはり非常に心が落ち着かない。残念なことにも何か振り回されている暮らしをしているのではないかという気がいたします。決してヨーロッパが良くて、日本がよくないという話ではないのですが、やはり二百年三百年経っているものをきちんと生活しやすいように変え

る力を大事にしているヨーロッパの都市。それがなくてもですね、物でなくとも生活習慣として百年、二百年じっくり考え込んで、つちかわれたものの中で暮らしている人の精神性というものは、やはりおだやかで未来をゆっくり見据えている。日本は戦後、しようがないのですが、産業主体の国のやり方として、とても忙しい、現在でも忙しい暮らしをさせられていて、使い捨て文化と、忙しい暮らし。教養や知識はたくさんあるんだけど、一枚の絵をゆっくり見る時間がない、地球の裏側のことは知っているのだけれど、目の前にある草木のことはほとんど知らないという、人間として歪なことができてきていると思います。そういう意味で、そういうことを修正してくれるのが文化であり文化財ではないかと。なんか変じやないかと考えさせてくれるという気がいたします。その例としましては、私は学生と日々付き合っているわけですが、震災の後、学生の生き方に対する意識が相当変わってきました。ひとつに、実際問題として、二万人近い人間が死んだわけです。それまでも震災があつて、大きくても数十名、もしくは数名。今回は二万人ですから、これはヒロシマの原爆以降、それに相応するのではないかと思われ

ます。そういう事態で人間が何も考えないではいられない。若者が未来に対するイメージを考え、何のために、どういう暮らしをして生きて行くかと、確実に考え始めているような気がします。むしろ私たちの次の時代を担うの方が、敏感に感じ取っているような気がします。

阪井教授…ありがとうございます。私は民俗学をやっているものですが、今の先生のお話の中の精神性だとか、学生さんの生き方の価値観の変化、人生観の変化ともいうんでしょうか、そういうところと民俗学は深くかかわっていかなければいけない学問なんだろうなあと感じますし、亡くなった死者たちの魂をどうするのとかということなんかも民俗学は真剣に考えなくてはいけない、それをまた生き残った人たちへ還元していかねければならないと思います。今日のタイトルである「文化財を守る」という、この文化財というものが、すでに今のお話の中にもあったわけですけれども、「かたちあるもの」と「かたちのないもの」とあって、今日のこれからの話の展開も、「かたちあるもの」に集中していきまされども、実はその「かたちのないもの」、生活習慣だとか、信仰の問題だとか、お祭りの問題だ



とか、そういったこともとても大事ですし、じつは震災直後に私が一番深く懸念したのは、東北は祭りの盛んな地域なんですけれども、この震災によって祭りがこの夏行われなかったのではなかつたかと、祭りがおこなわれないと、人々の心がさらに落ち込んでいって、立ち直りの心の動きが停滞するんじゃないかと、そういうことをとっても危惧していたのですが、そこはやっぱり東北の人たちのたくましさといえますか、夏の祭り、一生懸命やりましたよね。すごいなあと思つて、それでまた安心したのですけれども、まあそれは今日の話のメインではないので、ちょっと話題だけにいたします。

話を名古屋、東海地方の、いずれ来であろう地震に備えて、どのような体制でいるべきか、心構えをどうするか、あるいは具体的に何をしておかなければならないのか、とい

うことに進めたいと思います。これは休憩中にいただいた質問の中にくつかがございましたが、まずはこの博物館、あるいは美術館、こういうところがなにをすべきかというのがひとつと、それからまたこれも質問の中にもあるのですが、われわれ一般市民がどういうことを考えておくべきなのかということ、この二つ、たぶん違う観点だろうと思ひますので、まずはその博物館、美術館、またそこにたずさわる学芸員や研究者たちがどういうふうなスタンスでいるべきなのかということ、まず瀬川さんから話しただければと思ひます。

瀬川学芸員…それでは博物館としまして、名古屋市博物館、現状で博物館資料というものが、いま二三点を越えています。で、正確な数字は忘れてしまいましたが、八割か九割は市民の方から頂いた資料でございます。まして、まさに市民が作り上げた博物館である、という言い方をさせていただきます。

そういう意味では、名古屋市、市民が生活してきたものとすとか、守り伝えてきたものとかを、今現在も守つていっている。ですので、名古屋市博物館としてはできるだけそういう震災の時も博物館は被害

# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

にあわないように、そういった対策は、足りない部分ももちろんありますが、やっている。

あと、今回やはり衝撃的だったのは、津波であれほどの被害が出るということですが、そういった意味です。お預かりする、受託とか寄託とか言ったりしますが、指定文化財ですか、特に名古屋市の歴史・文化を知る上で重要な資料に関してはお預かりするという制度もございまして、そちらのほうで今、大抵件数でいくと千件を超えるような資料をお預かりしております。

ただ、物があるということやはりそれにはスペースも必要でございまして、正直なところ名古屋市博物館は今これ以上資料が増えてくるとちよっと収容しきれなくなってきたという状況もありまして、さっき震災があったときの対応でもありましたが、震災があったときに何かをするスペースというのが、実際この博物館の中にはなくなってきたままになっているのかなと思ったりもしています。

名古屋博物館としては、今そういった形で資料を守りながら、またお預かりしながら、伝えていこうとしています。

藤原教授・私のほうは、やはり被害つ

ているのは、本当にいろいろ備えていたにもかかわらず起こってしまった、堤防の高いのを作っていたのにも関わらずそれを越えてしまうというの、まあ、人間が読み切れないところにやってくるのが災害で、名古屋だってバンコクの今のような被害が起こってくるかもしれない。そういうわからないものに対して、不安が積みまとうのは当たり前のことなんです。平素できる用意といいたしましては、美術館、博物館もそうなんです。情報ももうたくさん腐るほどあります。その中で、限られた予算の中で、本当に何だったら揃えられるかというのがおのずと見えてきます。それ以上のものを望んだときに、その負担は他の方にもかかってくるし、まず一番大事にしなきゃいけないのは、人間ですから、本当に人間を大事にするという大鉄則を、自分をも含めてですね、皆さんの気持ちの中に肝に銘じていただきたいことです。何かあっても、その一日目から、二日目から、三日目から、少しずつですね、再生の方向に向かっていける力が出てくるように思います。何かあったら、何かあったら、どうだったら言ってますと限りなく不安が膨張するだけで、実現がありません。食料もまあ、変な話ですが三日分、一人三日分ぐら

い、水と乾パンぐらい有れば、私は今回乾パン食べましたけれども、三日分あると一週間いけます。パタパタ動かなければ。まあそういう風です。ね、人をまず大事にするということ。自分を考えてですね、無理せず、自分を含めて気持ちをしっかり持つということ。あんまりそういう訓練されていませんが、だからと言って宗教、道徳に走れとかそういう気は全然なく、どうこう言うことも全くなく、まっさらな気持ちとして人間を大事にする。そうすると絶対に、文化、文化財は残っていくし、育っていきます。この辺は少し私の妄想かもしれませんが。

阪井教授…そうですね、そのことは大事なことですけども、博物館は、市民に対して、市民の大事な財産を預かったり、あるいは調査してアドバイスするといった役割も果たされています。館の中だけではなくて、さきほどのあの文化財レスキューの瀬川さんの写真の中にもありましたような、一般民家にあるものについてのチェックとかそういったことも、博物館も関わってらっしゃるんですね。で、さきほどの瀬川さんの名古屋市の地図にもありましたけれども、市内あちこちこう文化財が分布・点在しているわ

けです。決して博物館の中だけにあ  
るのが文化財じゃなくて、市内あち  
こちに文化財がある。それを、全体  
を見て何かをしていく。あるいはそ  
れを日々保管したり管理している人  
たちに対して、博物館なり大学なり  
が、そういうことをアドバイスする  
か、あるいはいざ地震があったり洪  
水があったときに、どうするべきな  
のかとかいう、そういうことを働き  
かけるというのは、実際にはなされ  
ているのか、あるいはなされている  
とすればどういうことがあるのか、  
あるいはされていなければどうある  
べきなのか、そのあたりはどうで  
しょうか。

瀬川学芸員…そうですね、名古屋市  
博物館、名古屋市としましてですね、  
名古屋市教育委員会が出ておりま  
す「名古屋市史跡と文化財」という  
本がございます、そちらの中の添  
付されている地図を元にしたのです  
が、文化財としてその時載ったもの  
がこちらに載っている。赤いしるし  
で載っているわけですが、その中で、  
名古屋市が災害にあったときに、今  
すぐ何かをしようという体制がとれ  
ているのは、やはり指定文化財。こ  
ういったものに関しては地震があっ  
たときに所有者に連絡をして、なに  
か被害はありませんか、といったこ

とは聞いたりする体制は博物館とは  
別の部署ですが、ございます。

ただ、そういった指定物件でない  
文化財もやはり文化財です。博物館  
としてはそちらも非常に重視をして  
調査等もしているのですが、それ  
どのようにして、例えば災害があっ  
たときにレスキューをしていくかと  
いうのは、正直まだほとんど決まっ  
ていないという状況です。

情報としてはですね、名古屋市博  
物館開館以来もう三十何年たちまし  
て、市民からの文化財の情報とい  
うのが四千件以上、件ですのでおそら  
く文化財でいくともう何万という点  
数があると思うのですが、そういっ  
たものをどういった風に整理してい  
くのかというのは、正直非常に難し  
いと思っております。もしかしたら、  
そういった意味で何か先進的な事例  
等があったらまた教えていただきたい  
いなと思っております。

阪井教授…そのあたりは実際に被災  
地でご覧になって、藤原先生はど  
うお考えになっておられますか。

藤原教授…はい。本当に、博物館と  
いうのは収集品が少なくなっていく  
ということ、まずないわけで、も  
う永遠無限大に物が増えていくわけ  
ですよね。美術館もそうですけども。

その辺で、どういう今後政策をされ  
ていくか、例えば東北でも相当発掘  
されたものが、廃校になった学校と  
か、そういうところに山積みになら  
れています。捨てるわけにはいかない  
んで、そういうものを研究者が出て  
きて、どういう風に整理して保存し  
ていくのか、それも一つ大問題には  
なっております。増え続ける物に対  
して、どういう対応を私たちはして  
いけばいいのか。極端な話なんです  
がゴミの問題もそうです。それを根  
本的に一遍考え直さないとですね、  
永遠に増え続けます。それに、最高  
の状況を作ってあげたいのですが、  
これからはおそらく、循環型とよく  
言っておりますが、エコな保存方法  
も考えていかなければいけないとい  
うあたりが気になっております。

ちよっと趣旨を外れてしまつて申  
し訳ないですが、町中にある文化財  
を皆さんが大切に守っていきこうとい  
うのは、先ほど申し上げたように人  
の気持ち、人になるというのがまず  
一番と。われわれ博物館、美術館が  
できることというのは、はじめの文  
章でも申し上げましたように、日々、  
しっかりと調査する。最近はいぶ  
んお寺さん、神社仏閣そういうこと  
ろが、秘密主義というか、御開帳し  
ませんという方針から、どんなもの  
があるか少しずつ見せていただける



一角に築城されたのです。その後、名古屋は東部丘陵地の方に向けて発展していきました。

その一方で名古屋の西、とくに堀川から西の方というのは、地盤が弱く地盤沈下や液状化、水害の危険があります。庄内川や中川運河の決壊も懸念されます。地盤が弱い地域にも開発の波が押し寄せ、都市化が急速に進んでいきました。講義でもよく言いますが、名古屋駅、こちらでは名駅と呼んでいます。地盤が脆弱であり、昔はほんとに泥地でした。昔は蒸気機関車ですから、沼地のようなところ、住宅地から離れたところに鉄道が引かれることが多かったのです。名駅というのはその典型といえます。災害の危険性がある名駅は、再び大規模な再開発が実施されています。二〇二七年にはリニア中央新幹線が名古屋と東京を四〇分分で結ぶと言われています。経済界とか、この地域の行政担当者は浮かれています。感じです。

じめとして、長いスパンで地震や津波を考えることの大切さです。それと福島の原発事故を見ていて、つくづく制御できない原発事故の深刻さ、復興までのとてつもない時間の長さを痛感しています。あれほどの被害・犠牲を出しながら、原発を輸出する動きもあります。

寺田寅彦が言ったように、災害は忘れた頃にやってきます。私たちはどうも忘れっぽい傾向があります。こうした傾向を打開するためにも、歴史から学び、災害の経験を継承していくことが大切だと考えます。博物館や文化財も、こうした「災害文化」の伝承という視点から見直す必要があります。東北とりわけ三陸沿岸では、明治・昭和と大津波を経験してきました。「災害文化」もそれなりに確立されてきたのですが、それでも甚大な被害に見舞われました。これから予想される名古屋や東京の災害を考えると、防災・減災まちづくりとともに、「災害文化」をどう構築するかも大切だと思います。

阪井教授：ありがとうございました。物から人へという感じで話が展開してきた感じがいたしますけれど、もうひとつ、先にあつた通り、藤原先生も文化財を修復することを学ぶ学生を養成されていると思いますが、私

どものところではそういうところではなく、ごく普通の学生で、そういう学生と博物館の連携を模索してまして、普通の学生に対して博物館への関心を持たせるのは本当に困難だとつくづく感じているわけですが、それでも、文化財に学生の目を向けさせるために何か方策などはありますか。

藤原教授：学生は意外に芸術が好きで、油絵が好き、古いソファが好き、骨董が好きだから、と入学してきた生徒も多いし、以前にはあまり考えられなかったように若者も骨董品や文化財に興味があります。ヨーロッパなんかでも二十年位前から、若い人が蚤の市に行つてちよつと変わったアイロンを買つてきたり、こんなに古いハンガーがあつたといつて部屋に飾つたりして楽しんでいたりするので、そんなに無理やり学生をひっぱつてこなくても大丈夫だと思えます。ただですね、驚くことは、物を修理したことがほとんどない世代の子供です。それは全く私たち大人の責任で、使い捨てを吹聴してしまいましたから。あるときアルミでできたポットが壊れまして、底に穴が開いてしまつて水が漏れてしまつていたのを見て生徒が捨てようとしていたので、おいおい、といつて止

# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

めて、アルミの針金を差し込んで叩いて、昔なら誰でも知っているかしめをつくって、老人なら知っているやり方で直してコーヒーを沸かしたら、生徒は目を丸くしていました。電化製品でもなんでも、一部分が壊れたらすぐに捨てなくてはならない。なんか、普通の動物として地球に生きていく上で、あまりにも必要なものと不必要なもの差が出てきてしまっているような気がします。文化財はそういう意味でもう一度人間に必要な、温故知新ではありませぬけれど、古くからゆっくり時間をかけてきたものを見たり分析したりして、その中に隠された「なぜこれはここまで生き残ってきたのか？」を学ばせてくれます。

あと、大学と博物館の関係といいますと、アメリカのメトロポリタン博物館とニューヨーク市美術館と連携していて、美術史もしくは修復ということも含めて、学ぶこととそれを実際に作業する場所ということを連携付けてとても上手くやっています。また、ルーブル美術館もイフロアという修復学校と連携して若い人とつながっています。そういう早めの対処をきちんと大都会の学校はしています。それを全部地方まで、というのは難しいかもしれませんが、学ぶところという大学とそれを活用する博物館をもっと近くしていく。年をとった方から若い人まで、もの、文化財、美術品といったつながりのシステムは作っていくべきではと思います。

山田教授…学生にとっても、三、一は大きな衝撃だと思っています。三、一を見据えて、これからの生き方を考えてほしいと思います。

先日、東北の被災地にボランティアに行った学生の報告を聞きました。被災地に行った学生は本当に変わります。現地を吸い、現地の人と話す中で、自分の生き方や考え方にいろいろと刺激を受けるようです。私も現地に行って被災地・被災者の空気を実感できました。人文社会系の学生にとっても、現地に学ぶ姿勢、歴史に学ぶことの大切さをあらためて感じています。これからはボランティアだけでなく、東北の被災地の空気を感じるためにも、東北の地に旅行などで足を運ぶ学生に呼びかけていきます。

阪井教授…ありがとうございます。予定の時間になってはいますが、この辺でフロアのほうから、質問紙以外で、後半のシンポジウムのパネルディスカッションを通して何かご質問、ご意見などお二人ほどからいただければと思います。

参加者A…非常に興味深いお話ありがとうございました。先ほどのお話のところで増え続ける資料をいかに保存するか、というお話がありました。最近やはりよく聞くのはデジタル保存をして、ということがたくさんあると思うのですが、そのあたりの取り組みを、どのようにしているのか教えていただければと思います。

藤原教授…デジタル保存研究会などがあるようでした。画像として残していくのと、また、そのいくつかは材料、材質の資料として、例えば千個あるものはいくつか残して処分する、などの方法があるようです。また立体物、遺跡などは三次元計測器を使いデジタル情報にする。ここにもあります。これは高価で厄介なものなので、三次元で発掘した場所を計測したり、もしくは古い石でできた橋などが崩れそうなきに計測してコンピューターの中に記録します。石がどう動いて壊れたか、もしくは後々無くなったとしても形としては再現できる。材料は残ったり残らなかったりしますが、ただ、そこでいつも問題になるのは、システムが変わったり、ソフトが変わったり





# 「文化財を守る—東海大震災に備えるには—」

の、すり合わせにまだ壁があるような感じがします。

次に、濡れた和物の処理ですが、和紙であればとても繊維が長いので、一本一本の紙の構造とかが水にぬれても結構長時間耐えています。パルプはいわゆる材木を非常に粉碎して圧縮して作る用紙ですね、これは繊維が短いのですが、ただ最近はいろんなメデイウムが水にも耐えられるものを混ぜているので持つんですけれど意外に弱いんです。軸物なんかで注意していただきたいのは、震災などでカビとかバクテリアとかが早く発生します。なぜかと言いますと、表打ち裏打ちでのりを使っているんです。軸物、屏風など日本のものは糊、膠と、そういう天然のりが使ってあるということです。それが栄養になってしまつて、今回もパルプが栄養になっていてカビがそこで発生した。今回の災害では和物は解体しないと本紙といえますけど書いてある部分が救えないことがあります。裂(きれ)と言つて軸物なんかの飾りの布がありますけど、それがもう腐つてしまつて、本来ならば軸の絵とそのキレの部分の調和が楽しめるものなんですけども、本紙まで影響するので本紙だけでも救おうということ、現場で解体しました。また、紙ものの例えば本の場合

は、頁と頁がくつつくのがとても怖いので、まだ湿つていて竹べらではがせるものに関しては学生に、とにかく丁寧に一枚ずつはがして吸水紙という紙を挟んで乾燥させて、その後で、砂、ゴミよごれを刷毛で一ペーじずつ掃いていって、現在保存している状態です。もつとひどい、もう腐食が始まっているものに関しては、真空凍結乾燥しかないので凍らせたままになっています。今それを持ってもらっているやつは冷凍倉庫に入れていて、それを、順番待ちじゃないですけども真空凍結乾燥機に入れて、水分を氷の状態から空気の状態にしてしまう。途中、水の状態を作らない。という乾燥のやり方なんです。昇華させるという方法です。

参加者B…先ほどのスライドにあった、真つ黒になった水につかっていた古文書は、どうやって処理するのですか。

瀬川学芸員…正直修復作業のところまでいくと、私にはわからないのですが、先ほどありましたようにとりあえずは冷凍庫に入れるという作業をやつて、おそらくそのあとは真空凍結するんだと思います。で、先ほどお話にもありましたようにやっぱり和物は基本的には水自体に関し

ては比較的よい、昔は火事になったら大福帳は井戸に投げいれて燃えるのを防いだという話を聞いたりします。水にぬれるの自体はまだいいんだと思います。やはりそのあとのカビとか、そちらの方が気を付けなければならぬ、防がなければならぬという考えでよろしいんじゃないでしょうか。

藤原教授…あと文字資料でしたら、エックス線投影とかで文字を読むか、実験段階ですが、黒カビが生えて、黒い染みなどを作品に残すのですが、レーザーブラストというレーザー光線を当ててみたり、黒いカビだけ少し飛んでくれるんです。これは変な話ですけど初めは刺青をとるために開発された機械なんだそうです。こういうものも使つたりして色々な実験しております。

阪井教授…とても文科系のものには想像もつかない、科学的な精密な作業があるようなのです。もつとお話しをお伺いしたいのですが、そろそろ閉館時間も迫っております。

総括ではないですけど、東北の大震災被災地での先生が携わつておられるこういうことから学ぶことはたくさんあるのだなということをつくづく思いましたし、名古屋市はま

だそういうものに対しての世論の見方というのもまだまだ弱いなと感じました。これからも東北から学ぶことが我々にはたくさんあることを肝に銘じて、この会を閉じたいと思います。この講演会は市立大学と名古屋市博物館の連携事業の一つとしても位置づけておりますので、これから最後に博物館学芸課長の鳥居さんから、ひとこといただきたいと思えます。

鳥居課長…みなさんお疲れ様でございました。文化財を守る、このテーマは博物館にとって永遠の使命であります。今回市立大学のほうからこうした講演会・シンポジウムを一緒にというお話をいただきまして、是非にということでご一緒させていただきました。藤原先生どうもありがとうございました。

今日のお話、私たちにとっても大変有意義なものでした。地震が来る、大地震が来ると言われていましたが、これがオオカミが来るぞというような話ではないということを私たちは今実感しております。これまで震災が来たら、地震が来たらどうしたらいいのかという、起こった後のことばかりを言っていました。もうそれではだめなんだと。起こる前に何をするんだといった準備が必

要で、そして最悪の事態を考えていかななくてはいけないということも私たちは学んできました。

そういったなかで、文化を守るということの必要性、これも同時にわかってきました。人間の命、人命が優先されることは間違いありません。ライフラインを復旧する、食料を渡して、生きるエネルギーをとってもらおう、これは大事なんです。それと同時に、文化、生きる活力と言いますか、精神的なエネルギーも同時に補っていかないといけない、これは車の両輪みたいなもので、両方がないといけない。体力も必要ですけど、精神的なエネルギーも必要なんだと。そうしないと人間というのはうまくバランスをとった復興への道を見つけれない。そういった中で、文化財を守るということの意義というものについて、今日はかなり考える機会をいただいたと思っています。

見慣れた風景ですとか、生活とか、文化、あるいは素晴らしい芸術とか、そういうものに接して、人間らしさを取り戻したり、新たな想像力を生み出していく、そういったことが大事であって、文化財を守るといって博物館の基本的な活動をですね、より深い、より広い活動を求められてきたなという風に思っております。

今日のこの講演会とシンポジウムが私たちにとって、あるいは皆様にとっても大きな糧となっていただけることを願っております。本日はどうもありがとうございました。みなさんどうもありがとうございました。